

注意欠陥多動性障害 (ADHD) の神経遺伝学的相互作用と異常な行動の併存疾患：神話を払拭します。

[欠点 DE](#)¹、[陳 TJ](#)、[ブルーム K](#)、[Mengucci JF](#)、[ブルーム SH](#)、[Meshkin B](#)。

著者情報

1

カールスバッドサイエンス財団、名誉教授、シティオブホープメディカルセンター、デュアルテ、カリフォルニア州、米国。dcomings@earthlink.net

概要

バックグラウンド:

一般に ADHD と呼ばれる注意欠陥多動性障害は、一般的で複雑な、主に遺伝的であるが高度に治療可能な障害であり、より重篤な形態では、脳機能に深刻な影響を及ぼし、罹患者の生活のあらゆる側面が影響を受ける可能性があります恒久的に侵害された。この声明を支持する過去 50 年間の科学的調査の幅広い基盤にもかかわらず、ADHD について多くの誤解がまだあります。これらには、障害が存在しない、すべての子供が ADHD の症状を持っている、存在する場合はひどく過剰に診断され、過剰に治療されている、治療が危険であり、薬物中毒の傾向につながるなどの考えが含まれます。ほとんどの誤解には真実の要素が含まれているため、現実はどこにあるのでしょうか？

結果:

いくつかのクレームと反クレームを評価するために、文献をレビューしました。証拠は、ADHD は主に、神経伝達物質代謝酵素、神経伝達物質輸送体および受容体をコードする遺伝子を含む少なくとも 50 個の遺伝子が関与する多遺伝子性障害であることを示唆しています。その多遺伝子性の性質のため、ADHD はしばしば他の行動異常を伴う。それは子供だけでなく大人にも存在しますが、それ自体が必ずしも大人の生活の機能を損なうわけではありません。しかし、関連する障害はそうするかもしれません。さまざまな治療オプションがレビューされ、標準的な薬物治療の有効性に関与するメカニズムが考慮されます。

結論:

これまでのところ、ADHD に関与している遺伝子は全体像の一部のみを説明しています。残りの遺伝子の同定とそれらの相互作用の特性評価は、ADHD を生物学的障害としてしっかりと確立し、診断と治療のより良い方法につながる可能性があります。